阿佐ヶ谷教会　　Vol. 63-No. 02

# 信 友 会 会 報

２０１１年６月

**<<5月例会より>>**

2011 年度第 2 回目の例会では、青年五十嵐成見副牧師に壮年伝道について語っていただいた。平均年齢 70 歳を越える信友会員が今まで辿ってきた道とこれから迎える老いと死について素直に受け入れ、また多くの壮年が生き方を自ら問い直す時期でもある。そのような状況にあって、壮年伝道のあり方を学ぶことができた。

## 信友会　５月例会

## 壮年伝道について考える　　副牧師　五十嵐成見

＜聖書箇所：ヨハネによる福音書第 3 章 1~21 節まで＞

現代の男性像は一昔前と比べて異なってきている。現代においては、炊事・家事・洗濯など夫婦が共同で行うべきものであり、子育ても、母親が全てを担うよりも、夫婦が共に子育てを為していく価値観へとシフトチェンジしてきている。家庭に割く時間は、一昔前の世代の男性よりも多くなり、それが、日曜日の午後などに集会などがあると、行くことが出来なくなっている一因でもまたあるように思われる。

けれども、定年を迎え、退職をすると、ライフスタイルはそれまでとは一変する。家庭においても、社会においても、少人数ないし一人で生活する時間は多くなり始める。育ててきた子どもも手を離れる。これまで会社に尽くしてきた大半の時間は余暇を過ごす時となり、改めて、自分の生きる存在意義を問われ直す時期ともなる。

ヨハネによる福音書に、ニコデモという人物が登場する。彼は、ファリサイ派に属するユダヤ人の議員であり、ある権威を有していた人物だと思われる。しかし、その議員が、主イエスのところに教えを乞いに行く。しかし、周りの目が気になった。主イエスはファリサイ派を厳しく批判していたことが、福音書の中によく見いだされる。その批判している相手に教えを乞いに行くことが、どれだけ同胞者から冷たい視線を向けられることになるかわかっていた。要するに、ニコデモは誰かに後ろ指を指されたくなかった。だから、「ある夜」(2 節)、主イエスのもとを訪れる。人目を避けて主イエスに出会う。

これらの行動に、ニコデモから見える男性の特質がある。

１．自尊心が高い。彼は、ユダヤ人の議員であることを誇りに感じていた。だから、白昼堂々と主イエスの元に行くことは、自分の名を汚すことになるので、それを為すことができなかった。ここにニコデモなりの自尊心が見える。

２．孤独になりやすい。「ある夜」と象徴しているように、彼は、誰も歩き回らない夜を選んで主イエスのもとに行く。もちろん、一人で出かけただろう。ニコデモは、主イエスに出会いたかった。けれども、それを同じファリサイ派たちに打ち明けることができなかった。心の秘密にしなければならない、と思ったのであろうか。

男性もまた、社交的な人であっても、肝心なところで自分の秘密を打ち明けない。誰かに聞いてもらうことで安心するよりも、心の小部屋に秘密を隠しておくものだ。ニコデモも、その闇があったのではないか。けれども、主イエスのことを聞きつけて、いてもたってもいられなくなった。主イエスに、一縷の希望があった。
３．老いと死の問いを抱く。3 節の通りである。老いの問いは、死の問題と結びつく。主イエスはニコデモとの出会いを通して、「独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得る」（16 節）という御言葉を与えられた。主イエスは、何がニコデモの問いかけの本質であったのかを知られていた。

以上のように黙想的に浮かびあがるニコデモの姿を分析してみたが、これはまた典型的な男性像をあらわしているのではないかとも思う。私たち男性にとってどこかひそかに頷かざるを得ない心がある。

Ｋ教会のＮ兄は、妻が熱心なキリスト者であるが、定年になるまで、教会には行っていなかった。キリスト教が戦争を引き起こしたり、イエスが復活するというような荒唐無稽の教理に対して懐疑心を抱いていた。また、神依存する人間は弱い存在であり、自助努力で人間は克服することができる、との自負心もあった。けれども、定年を迎え、少しずつ壮年会の集会などに出始めるようになり、聖書も読み始めるようになった。心臓病が再発し、自分の健康に不安を覚えたり、友人の死を経験する中で、一層切実になった時、「私は復活でありいのちである。私を信じる者は死んでも生きる」（ヨハネ 11:25）という御言葉にとらえられ、心に平安が与えられたという。これは、一般的な知見からの教理に対する懐疑は、主イエスの救いを得る時に問題にはならない、ということを指し示している例ではないだろうか。N 兄にとっての一番の要因は、伴侶である妻がキリスト者であり、妻のすすめがあった。定年という、人生の大きな転換期を迎える中で、自らの人生を問い直し、向き合う中で、キリストの福音が新しい実を歩むための大きなきっかけになる。そしてそのきっかけが、人間を通して与えられる。呼びかける人がいなければ人は教会につながらない。だからこそ、私たちの人間関係は、依然として重要な伝道手段になる。

しかしまた同時に、それと共に、男性は一般的な傾向として、理性的な面の好奇心がある。「真理」問題への探求である。また男性は感情よりも理性・知性が先に立つ傾向がある。そこで、急いて感覚を処理することよりも、知性的なアプローチから落ち着いて物事に取り組むことを好む。そこでこそ重要になるのが「聖書」である。ニコデモは、主イエスに出会い、ヨハネ第 3 章 16 節という、マルティン・ルターして、「聖書の中の聖書」と言わしめた御言葉にとらえられる。御言葉にこそ、主イエスの救いがあり、人間に福音を備えさせる。聖書を通して御言葉に触れる機会を持ち続けてもらう作業が、とりわけ壮年層の伝道には必要であろう。しかしもちろん、これは壮年層に限ったことではない。しかしたとえば N 兄が自らの死、友人の死を感じた時に、聖書の御言葉によってとらえられた。その御言葉そのものがあるからこそ、死という人間の最も重大な問いに対して、諦念でも諸行無常でもない「永遠のいのち」という勝利の答えを与えられる。

四谷にある麹町カトリック教会では、年間 200 名の受洗者が与えられるという。その教会に仕えているある神父が、なぜあなたのところの教会は受洗者がそんなに多いのですか、と聞いたら、誇らしげに、「私達は聖書研究会を週に何度も行っているのです」と答えたという。やはり、伝道の基本は、聖書であり、御言葉に聞くということである。聖書を一緒に読む時間を一緒に持つことから、壮年伝道が始まるのではないか。

聖書に聞くということは、福音に直接触れるということである。その意味で福音をとりつぐ者の責任は重大である。福音とは「罪の救い」のことである。主イエスは、「御子によって世が救われる」（第 3 章 17 節）ために神から遣わされた。聖書を読むことによって罪の問題を避けて通ることはできない。日本はよくルース・ベネディクトの『菊と刀』の主張のように、罪文化ではなく恥文化である、と言われる。そのことをより現実的な史実問題から切り込んだのが遠藤周作の『海と毒薬』である。いわば、この作品を通して、遠藤は日本人の文化的深層と福音を対峙させつつ、暗示的な主張として、より日本人の文化思想に根付いた福音理解のアプローチを探求しようとしている。それに対して、三浦綾子は、『氷点』という作品を通して罪の問題を同じように取り上げるが、むしろ非常に鮮明に読者に対して聖書的な「罪」という問いをぶつけてくる。カトリックとプロテスタントの違い、という安直な括りで見ることはしたくないが、私自身としては、どちらかと言えば三浦綾子のアプローチに合点がいく。両者どちらにしても、死と罪の関係を問う。明らかに遠藤は、死と罪の問題

を露わにしながら、日本独自のキリスト教の土着化の福音の必要性を暗に示し、三浦綾子は、正面から、罪と死の問題を取りくみ、贖罪を語ることによって、聖書そのものの福音を伝えようと試みている。

しかし、いずれのアプローチにしても、「罪の救い」の問題というのは、一朝一夕で理解する事柄ではない。忍耐力、持続力を伴う息の長い伝道が必要である。壮年伝道は、あわてず、のんびりと、しかし確かな福音を伝えていくことが肝要なことである。ドイツの実践神学者に E.トゥルナイゼンがいるが、次のような言葉を語っている。「われわれの心が向きを変えて神のところへ帰っていくのは、大病が日ごとにすこしずつなおっていくのに似ている。一日の経過は目に見えないくらいだし、からだにそれと感じるものではない、長い期間を経ていやされていく、それと同じだ。」福音によって悔い改めるということは、日を要する。しかし、その御言葉に触れる者は確かに、確実に、「癒し」がある。それは肉体を超えた霊的な慰めのことである。一日の経過が目に見えないからと言って、伝道をやめてもあきらめてもならない。その御言葉を語り続けることによって、長い期間を経て癒されていく。その御言葉の時の力に私たちは期待し、委ねつつ、伝道すべき言葉を話していきたい。

最後にもう一度老いと死の問題に戻る。この老いと死の問題に対して、私たちキリスト者は、応える言葉を持っていなければならない。そこで、再びトゥルナイゼンの言葉に聞きたい。「われわれの生が時を定められているのは、神のよき秩序に属するがゆえに、人間は平安のうちに眠りにつくことがゆるされている･･･牧会者が死なんとするものを慰めなければならない時、このことを見失うことはゆるされない。」(『牧会学Ⅱ』) 死は全て、神のよき秩序に属するものである。人間が限界ある存在であるということ、それは、裁きではなく、「神のよき秩序」に招き入れられていることである。そのことを見失うことはできない、とトゥルナイゼンは告げる。神の秩序なしに死の問題を克服することはできない。しかし、神の秩序がある故に、人間は、正しく死を迎えることがゆるされる。

死の問いは、老いの問いとも重なり合う。老いは神のよき秩序の中に組み込まれている。不自然なことではなく、自然なことである。アンチエイジングという言葉があるが、アンチになることは決してない。むしろエイジングを受け入れていくことが、私たちの人間にとって最もふさわしい秩序である。若さにしがみつく必要もない。過去を栄光にし、現在を蔑むのでもない。そうではなくて、日々「新しくなる」ことである。「あなたがたは新たに生まれなければならない」(7 節) と主イエスは言われる。それは、日々新しくなるということである。肉体的な若さに生きるのではなく、新しさに生きる。神の御言葉の新しさ、祈りと賛美の新しさに生きる、ということである。

同じくドイツの実践神学者である R.ボーレンが 77 歳、晩年になって書いた文章がある。「人間は、現在のあるがままの自分に留まるべきではありません。むしろ、今は、まだ自分がそうなっていない者になるべきなのです。･･･つまり、新しくなるべきなのです。だからこそ、人間を造られた方は、死すべき心の中に、永遠をおいてくださいました。その永遠の心が働いて、敢えて不安を呼び起こすのです。憧れは、･･･おそらく意識しないままですが、---新しい存在を求める憧れとなり、さまざまな光をともすのです。」(『憧れと福音』) 人生の円熟を迎えた神学者、人生の暗闇の体験（伴侶を自死でなくしている）をしてきたボーレンが、なお、「新しくなるべきだ」と語る。人間的な失望を抱えながらも、なお神への憧れ止まず、新しい存在への憧憬を抱く。私たちは、この日々新しい信仰に既に日々生かされている、主イエス・キリストの御名によって。

「永遠のいのち」に生きるとは、すなわち、永遠に支えられ、一日一日を誠実に生きることにつながる。一日一日を伝道のために生きる、神の御言葉を伝えるために生かされていることを感謝するものでありたい。